

ウィトゲンシュタイン文献紹介

編集部による自由企画枠として過去五年間のウィトゲンシュタインに関する研究論文のうち重要なものをピックアップして紹介する。今回は小論「ウィトゲンシュタインの哲学観について」を付することにする。いささかでも資するところがあれば幸いである。

ウィトゲンシュタインの哲学観について

ウィトゲンシュタインに関する最も新しい書誌によれば、彼の仕事についてこれまでに書かれた論文と書物の数は、実に5868に上っている。しかしながら、このようなウィトゲンシュタイン研究の隆盛は、必ずしもそのままウィトゲンシュタイン哲学の影響力の大きさを意味しているわけではない。海外、特にアメリカでは、すでに1970年代からウィトゲンシュタインへの関心の低下が囁かれてきた。アンソニー・ケニーによれば、こうした事態の背景には、哲学における科学主義の台頭——数学に特徴的な正確さを模倣して、言語学の一般理論を言語哲学の理想とし、人工知能の抽象的体系を心の哲学の目標とするような思潮——があり、その結果ウィトゲンシュタインの仕事はなおざりにされているということである（ウィトゲンシュタイン哲学が、科学との対話をまったく拒否しているか否かは、議論の余地がある）。このようなウィトゲンシュタイン離れの傾向は、クリプキのあの *Wittgenstein on Rules and Private Language* (1982) の出版と、それが喚起した多くの議論を経ても、歯止めがなかったわけではない。

ウィトゲンシュタインから人々を遠ざけさせているものとして、一つには、彼のネガティブな哲学観が指摘できよう。前期においても後期においても、彼にとって哲学とは、理論ではなくて活動、思考を明晰にして哲学的問題を解消するという活動であった。「私の命題は、私を理解する人が、……最後にそれを無意味なものとすることによって、解明を行うのである」（『論理哲学論考』6.54）、「真の発見とは、私が欲するときに哲学するのを中断することを可能にするような発見である」（『哲学探究』§133）、「哲学はすべてをあるがままにしておく」（『哲学探究』§124）、「考えるな、見よ！」（『哲学探究』§66）等々、これらのよく知られた発言は、その意味するところを吟味する以前に、ある人々を強く魅了すると同時に、またある人々にとって嫌悪感と知的不満足を引き起こすものであろう。

しかしながら、ここではさしあたり態度を保留して、ウィトゲンシュタインの哲学観の側面に証明をあててみたい。彼は1937年の覚え書きの中でこう書いている。

哲学を勉強したことがないので、あれやこれやの判断を下すことができない、という人がときどきいる。これはいらいさせられるようなナンセンスである。というのは、哲学が何か科学のようなのだと申し立てられているからである。(Culture and Value p. 29)

「哲学とは、何かをなす以前になすべきことであって、判断するとはどういうことかわからなければ判断することができない」というナンセンスに対して、ウィトゲンシュタインは苛立っている。彼によれば、哲学とは、事象の背後にあるものを説明して事象を基礎づける科学なのではない。説明を必要とするのは、事象そのものではなく、あるオブセッションに取りつかれた我々なのである。(もちろん事象そのものが説明を要する場合もありうる。ウィトゲンシュタインはすべての科学的説明を否定したわけではあるまい。) ウィトゲンシュタインの哲学とは、このオブセッションを解消する活動である。その活動は事象を説明するのではなく、事象をただありのままに記述することに終始する。

例えば、言葉の意味や、概念を規定しようとする際に、そのような規定の「正確さ」とは何か、ということを我々は問題にする。しかし「正確さ」というのは、説明を求めるという仕方では問われてはならず、それがどういう種類の言明によって語られているのかを考察することを通じて問われなければならない。こうして「正確さ」の記述がなされる。「食事は正確に一時に始まるのに君は遅れた。グリニッジ天文台の時刻に合っていないじゃないか。」と言うのはナンセンスである。普通は「食事は正確に一時に始まるのに君は遅れた。みんなで食事ができないじゃないか。」と言うであろう。こうして「正確さ」というのは事柄の客観的性質のものではなく、そのつどの目的との関係による評価であることが明らかになる。換言すれば、意味や概念といったものが、正確な定義の形では規定されないからといって、それらが不完全であるわけではない。そのような正確さの要請はナンセンスな幻想にすぎない。そうではなくて、言語ゲームのプレイヤー同士のコミュニケーションにおいてそのつど設定される目的に応じて、我々の理解の正確さが評価されさえすれば、それで十分なのである。こうして「正確さ」のオブセッションは解消される。このような活動——理論ではなく、思考を明晰にする活動——がウィトゲンシュタインの哲学なのである。

確かに、このようにみても、決してウィトゲンシュタインが弁護されたというわけではない。というのも、哲学的問題に悩む人に対して、その問題の無意味さを露にしさえすれば、哲学の使命は終わりということになるように見えるからである。しかし、果たしてウィトゲンシュタインの哲学の内容はこれだけで尽くされているであろうか。ここでは彼の哲学のポジティブな面について、次の二点を示唆しておきたい。第一に、ウィトゲンシュタインは手稿のなかで「哲学は哲学者たちに対してのみ有用な道具であるばかりでなく、我々のなかの哲学者に対しても有用な道具」であり、

「我々の仕事には終わりが無い」と述べており、決して「考えるな」という知的怠惰を称揚しているわけではない。弛みない哲学的思索を自らの課題とすることの大きな価値に同意する点で、彼は他の理論指向の哲学者たちと同じ平面上にいる。第二に、言わずもがなのことではあるが、哲学的思索の真価の試金石となるのは、流行やブームにのることではなく、彼の言葉を借りれば、たとえ誤りが含まれていてもその思想が徹底的に明晰に表されていることであり、そしてたとえ少数であれ、誰かがそのような思索の成果と格闘することによって、彼が自分自身の頭で考えるための刺激を得ることができるということである。そしてウィットゲンシュタインの哲学がこの試金石に耐えうるものであることは、間違いないことであろう。(文責 羽地 亮)

Baker, G.P. and Hacker, P.M.S.: Malcolm on Language and Rules, *Philosophy* 65, 167-179, 1990.

この小論はペイカー＆ハッカーによる、マルコム の “Wittgenstein on Language and Rules” に対する反論である。

両論者によれば「ある規則に従う」ということがどのようなことであるのかを直接決定するのはその規則そのものであり、そこでは社会集団の中での合意を考える必要はない。例えば、自分だけが理解できる秘密の規則を作ってそれに従うということが可能なのだから、私的言語は論理的に可能であり、ウィットゲンシュタインも同様に考えていたと両論者は主張する。

両論者によれば、ウィットゲンシュタインの関心は、現実には共有されている言語とそうでない言語との区別ではなく、原理的に共有可能な言語とそうでない言語との区別にある。たとえ私的な規則であっても、その規則に反して誤ったり、その誤りを訂正することが可能であるなら、その規則は他者にも理解することができるようなものであるはずである。つまり「規則に従う」ということができるために必要なのは、その規則に関して複数の人間に合意が現実には成立しているということではなく、その規則に関する合意が原理的に可能だということなのである。このように言語等の規則はすべからくコミュニティの中での現実の合意を前提しているわけではなく、現実の合意を必要とするのは「共有された」言語だけであるにすぎないと両論者は主張する。(蔵田伸雄)

Bouveresse, Jacques: The Darkness of this Time: Wittgenstein and the Modern World, *Philosophy* 28, 11-39, 1990 Supp.

ウィットゲンシュタインは、自分の哲学を、時代の傾向に合っていないものとして語ることがしばしばあった。彼によれば、時代の傾向に合った哲学とは、前進的に改善可能と見なされる仮説と説明を形成し続けることを本質とする経験科学

の方法を、自らの従うべき理想と考えているような哲学である。ウィットゲンシュタインは、このような哲学も含めて、現代文明を構成しているあらゆる精神的活動が「進歩」の観点を取り、目を未来のみに向けて、絶えず複雑さを増して行く構造をもった一つの「建物」を築くことに勤しんでいると見て、この「進歩」の観点を現代の「迷信」として批判した。しかも彼は、現代文明の単なる批判をもって事足りたものではなかった。ウィットゲンシュタインは、このような時代の傾向に逆らって、直接この世界そのものへと目を向け、例えば所謂自然法則を不可侵なものに見なし、これによってのみ世界は説明され得るという考え方のような、さまざまな先入見を自明なものとし、世界のより一層明瞭な把握と説明に努めることを、自身の哲学の課題としたのであった。ウィットゲンシュタインの関心は、一つの「建物」を建築することよりも、可能な諸々の「建物」の基礎に関する明瞭な見解をもつことに向けられていたものであり、彼が自分の哲学を時代の傾向に合わないものとして語ったのも、まさにこのような意味においてであった。

(浅沼光樹)

Ishiguro, Hide: Die Beziehung zwischen Welt und Sprache: Bemerkungen im Ausgang von Wittgensteins Tractatus, in *Wittgenstein in Focus—Im Brennpunkt: Wittgenstein*, Mc Guinness, Brian (ed), 49-66, Amsterdam, Rodopi, 1989.

パットナムをはじめとする多くの哲学者は、ウィットゲンシュタインの前期の思想と後期の思想とをはっきりと分離して、『論考』の像理論は真理と指示の理論であり、『哲学探究』の意味適用の理論は言語理解の理論であるとしている。これに対して論者は、『論考』の初期の哲学と『哲学探究』の後期の哲学との強い連続性を主張し、『論考』においてウィットゲンシュタインが挙げる要素命題について、1、我々の言語と世界を結合しうるか、2、あらゆる命題の真理条件を基礎づけられるか、3、経験に直接与えられるものを表現しているか、という三つの観点から考察を加え、これまでの哲学者による解釈をことごとく否定する。そして、『論考』において既に、ウィットゲンシュタインが、我々の言語と世界との関係は指示代名詞の指示的使用や名前—所持者関係によってでなく、世界における言語の習得、すなわち命題の真理条件の理解によって確立されること、その外に普遍命題に対する単称命題の自動的な優位は存在しないことを主張していることを明らかにし、『論考』の像理論もまた言語理解と言語適用の理論であって、『哲学探究』の適用理論との間に対立を立てることは不可能だと結論づけている。

(山下和也)

Klage, James C.: Wittgenstein and Neuroscience, *Synthese* 78, 319-343, 1989.

論文の前半では神経科学は哲学の問題（とくに、心の哲学における問題）の解決に関与しない、というウィットゲンシュタインの主張について議論され、後半では神経科学は心の哲学のすべての内容をとらえられない、という主張について議論される。前半で論じられているウィットゲンシュタインの主張における主要な点は、哲学の問題の科学的な解決は不可能であるということにあると筆者は考え、そのことについては同意を示す。しかし科学は新しい事実を発見するのみならず、それによって概念を変化させることも可能であり、そのことを通じて哲学の問題の概念的な解決が可能であるとも考えられている。他方、合理的な実践的主体としての自我の概念を失いたくなければ、民間心理学 *folk psychology*（あるいは心の哲学）を捨て去って神経科学のみを採用することはできない。ウィットゲンシュタインのテキストは民間心理学には神経科学では捉えられないものがあることをも示唆しており、民間心理学の価値を評価していると筆者は解釈する。

（副島 猛）

Malcolm, Norman: Wittgenstein on Language and Rules, *Philosophy* 64, 5-28, 1989.

論者はこの論文で G. P. Baker と P. M. S. Hacker による『哲学探究』のコメントリーである *Wittgenstein : Rules, Grammr and Necessity* (Basil Blackwell 1985) における、「規則に従うこと」に関する両者の解釈に異議を唱えている。

ベイカーとハッカーはウィットゲンシュタインの「規則に従うこと」という概念には *regularity* が前提されているにすぎず、必ずしも合意やコミュニティの概念は前提されていないと解釈する。例えば、生れてから他人と全く接触したことの無いような人間が一種の私的言語を想造することは可能であり、その人間がその私的言語を用いているような場合も「規則に従う」ことに含まれるのであり、ウィットゲンシュタインもそう考えていると両者は解釈する。

しかし論者は言語使用や計算などの「規則に従う」という行為は多数の人間に共有された生活形式に基づく社会的行為であると考ええる。そして論者は、規則に従うという行為が可能であるためにはその規則に関するコミュニティの中での暗黙の合意が必要であるとし、ウィンゲンシュタインも同様に考えていたと主張する。

（蔵田伸雄）

W.P. Mendonça, Konstanz: Der psychophysische Materialismus in der Perspektive Kants und Wittgensteins, *Kantstudien* 81(3), 339-359, 1990.

論者は、いわゆる心身問題を巡る今日の唯物主義的な議論を、カントとウィットゲンシュタインによる唯物主義批判を通じて批判している。論者の主張によれば、ウィットゲンシュタイン的な、精神的なものについての言葉と物理的なものに

についての言葉の間の文法的区別の探求は、カントの、心の理念の超越論的地位についての研究に正確に対応しており、カントは心の超越論的理念をカテゴリーから区別することで、ウィットゲンシュタインは意図や動機についての日常の言語活動と自然記述の言語活動とを区別することで、それぞれの混同から生じる混乱を防ごうとしている。論者によれば、カントとウィットゲンシュタインは、心の実在性を巡る問題が、普通の生活や常識から切り離された理論的な問題、根拠のない謎掛けに過ぎず、むしろ常識によってのみ解決されるとする点でも一致する。論者はまた、カントによる合理的心理学の批判のみを引いて、心理学というものがあるか否かを問題にし、否定的な答えを出しているが、カントは経験的心理学を否定してはいないので、この点のカント解釈にはやや無理があるように思う。最後に、J. Searle の言葉を引用して、最近流行の唯物主義的な心の概念は、行動主義も機能主義も物理主義も、結局は心の否定に終わっていると断言し、自然科学的な見方の人間の行為への根拠のない拡張は可能な研究のプログラムではなく、迷路を提示するのみであると結んでいる。(山下和也)

Moser, Paul K.: Malcolm on Wittgenstein on Rules, *Philosophy* 66, 101–105, 1991.

この小論もベイカー&ハッカーの“Malcolm on Language and Rules”と同様に、“Wittgenstein on Language and Rules”でのマルコム的主張に対する批判を意図したものである。特に論者は「規則に従う」という概念はコミュニティの中での合意を前提しているというマルコム的主張を批判し、コミュニティの中での合意や他者とのコミュニケーションや社会的訓練を前提しなくとも「規則に従う」という概念は理解可能であると主張する。そして論者は、ウィットゲンシュタインも『数学の基礎』において規則の外延(extension)を与えるのは社会ではなく「私」であると考えていると主張する。論者もマルコムも言語使用に関する正しい、正しくない、という区別の基礎となるのは行為に関する agreement であると考えている点では一致している。しかしマルコムがその agreement は共同体の中での合意でなければならないと考えるのに対して、論者はその agreement が多数者による「合意」のみならず、一人の人間によってなされる複数の行為の「一致」であってもよいと考えている。かくして論者は、ウィットゲンシュタインに関する「個人主義的な理解(individualist reading)」も、マルコムの理解と同程度に有効な理解であると結論づける。(蔵田伸雄)

Noë, R. A.: Did Kant Anticipate Wittgenstein's Private Language Argument?, *Kantstudien* 82(3), 270–284, 1991.

『純粹理性批判』のパラロジスムスにおけるカントのデカルト主義批判を、

ウィトゲンシュタインの私的言語論を予想するものとする解釈がある。論者はこの解釈を否定する。こうした解釈の一つとして論者がここで批判の対象としているのはストローソンのカント解釈である。デカルト的な精神の像は、1. 人は直接の認識的自己意識、つまり意識の主観的状態の知識をもつ、2. この直接の自己意識の対象は個人的意識の私的内容である、3. 内的経験の知識は外界のあらゆる知識に関して基礎的である、という三つのテーゼを含む。ウィトゲンシュタインの私的言語論はまさにこれらのテーゼを攻撃するものなのであるが、ストローソンは、カントもまたこれらのテーゼを意識の自己再帰と「私」という代名詞の使用の基準を必要としない確実性という観点から粉碎した、と主張する。これに対し論者は『純粹理性批判』を分析しつつ、カントが実はこれら三つのテーゼ全てを承認していることを、一つ一つのテーゼについて論証していく。さらに論者は、自己認識に関する、自己再帰の可能性は他者による再帰の可能性を前提し、またその可能性は意識状態の自己再帰と他者による再帰の双方が人格（person）から成っていなければならないことに基づく、というストローソン自身の教説をも結局はデカルト的な第一のテーゼを否定せず、正当化するものであるとする。そうして、カントやストローソンに対する、真にデカルト的テーゼを否定するウィトゲンシュタインの私的言語論の優位を主張するのである。（山下和也）

Philips, D. Z. : Religion in Wittgenstein's Mirror, *Philosophy* 28, 135—150, 1990
Supp.

ウィトゲンシュタインの哲学は、その全体を「鏡」と見なすことができる。ウィトゲンシュタインにとって、哲学の課題とは言語の現実的使用の明瞭な把握である。このことは、言語の現実的使用をあるがままに記述することによって、読者が自分自身の思考をそこに映して見ながら、その誤りを見い出して訂正できる、そのような「批判的（critical）な鏡」を呈示することに他ならない。

この論文では、宗教的信仰に関するウィトゲンシュタインの言説、中でも特に、宗教的信仰において用いられる語に意味を与えるのは practice である、という彼のテーゼが言わんとする所を理解することが課題となるのであるが、筆者によれば、この課題の遂行のうちで同時に上記の観点の正しさが確認されることになる。つまりウィトゲンシュタインは、宗教的信仰における言語の現実的使用に干渉しようとしたのでも、合理性という予めしつらえられたパラダイムを用いてこの使用を基礎づけようとしたのでもない。むしろ、この使用をただあるがままに記述しようとしたのであり、このことによって、宗教的な practice に対する哲学の関係も、この practice そのものも単純には総括し得ないことを、つまり多様な文脈において理解されるべきであることを彼の「鏡」に映したのである。筆者はこのように結論している。（浅沼光樹）

Stern, David G.: The “Middle Wittgenstein”, *Synthese* 87(2), 203–226.

『論考』執筆の頃のウィトゲンシュタインは初期ウィトゲンシュタインと呼ばれ、『哲学探究』の頃は後期ウィトゲンシュタインと呼ばれる。筆者は初期から後期への移行期、「中期ウィトゲンシュタイン」の思想の動きを追跡する。筆者によれば、この時期のウィトゲンシュタインは『論考』での論理的原子論を捨てて、論理的ホーリズムの立場を取るようになる。こうした転回の背景には、直接的経験を分析・記述する人工言語（それは「現象学的言語」と呼ばれていた）の構想をウィトゲンシュタインが捨てたことが影響している。そして、その代わりに日常言語が中心に躍り出た。論理的ホーリズムの見地からは日常言語は科学理論と同じように多くの規則のシステムとして考えられていた。だが、1930年代中ごろ、日常言語の意味が社会的コンテキストのうちでの行為、生の形式に多く依存することが自覚されるにつれ、論理的ホーリズムの立場は維持されなくなる。というのは生の形式自身は規則として形式化することができないからである。この最後の立場を筆者は実践的ホーリズムと呼ぶ。こうしてウィトゲンシュタインはその中期に、論理的原子論から論理的ホーリズムを経て実践的ホーリズムへと到ったことが示される。議論の本筋とは関係ないが、実践的ホーリズムの立場とハイデッガーの思想の近さに対する示唆も興味深い。（山脇雅夫）

Ter Hark, M.R.M.: The Development of Wittgenstein's Views about the Other Minds Problem, *Synthese* 87(2), 227–253, 1991.

他者の心の問題に対するウィトゲンシュタインのアプローチが、1929年（彼がケンブリッジに戻った年）から1951年（彼の死の年）迄にどのように発展していったかを吟味することが、この論文の目的である。ウィトゲンシュタインの論評者の中には、『哲学的考察』の中にある、明白な行動主義的主張を無視し、彼が決して行動主義者であったことはないという者もいる。また逆に、『哲学探究』を含む後期の著作の中にさえ行動主義者としての彼を読み取る者もいる。しかしながら筆者の見解は、『哲学的考察』から『哲学探究』への発展の中で、ウィトゲンシュタインのアプローチが行動主義的なものから、非行動主義的なものへと変化していった、というものである。注目されるべきは、筆者は公刊されていない遺稿中の言明に照らし合わせることによって、公刊されている上記著作の元々の文脈を明らかにし、その言明の正確な意味に光を当てようと試みている点であろう。

筆者の見解は次のような手順で論証されている。まず、『哲学的考察』には行動主義的要素がはっきりと存在しているということ、そして『哲学探究』や後期著作にある三人称の人間についての言明を行動主義の立場に押し込める根拠はないということが論じられる。第二に、「魂に対する態度」に注目することによって、

それがカルナップ流の論理的行動主義の拒否（1941～1949/50年にかけての草稿で述べられている）という文脈で初めて把握されうることが論じられる。最後に、最後の未公開の著述で述べられる、素振りpretendingの概念の取り扱いを通じて、ウィトゲンシュタインが行動主義者のように素振りの問題を無視する立場を採ってはならず、彼の立場が行動主義の立場であるとは言えないことが論じられる。（竹島尚仁）

Westphal, Jonathan: Black, *Mind* 98, 585-589, 1989.

暗闇は存在しても黒っぽい光などありえない。また、暗い透明は存在しても黒っぽい透明などありえない。ウィトゲンシュタインは『色についての考察』において、幾つかの例を出して、暗さ（darkness）と黒さ（blackness）との区別を指摘している。筆者によれば、こうした暗さと黒さとの区別は、暗いということが色や照明の欠如であるのに対し、黒いということはむしろ色を有するということであり、照明を反射しない色であるという意味で、受ける照明を必要としている、という区別に帰着する。もしそうだとすれば、黒いということは、照明との関係、あるいは暗さとの関係の内に、少なくとも三次元的な文脈において、理解されなければならないことになる。つまり、黒さや暗さといった色概念は、色のついた点のモザイクからは生じないのである。『色についての考察』の一つの眼目は、視覚経験の内容が色のついた点のモザイクであるという経験主義者の考え方を批判することであったが、黒という事例の検討もこの眼目に適うものであると考えられる。

（筆者は既に1986年の“White”という論文で白を扱い、1987年の“Colour: Some Philosophical Problems From Wittgenstein”という著書で、黒を除いた形で、主要な色を扱っている。）（久米 暁）

Williams, Meredith: Transcendence and Return: The Overcoming of Philosophy in Nietzsche and Wittgenstein, *International Philosophical Quarterly* 28, 403-419, 1988.

ニーチェとウィトゲンシュタインは、哲学の伝統に病いを見てその克服を目指したという点で共通している。しかし、両者はその診断と治癒の理解という点において大きく異なっている。前者が、心理学的・歴史的アプローチ（系譜学）によって、同時代の文化・社会の全般にニヒリズムの病いが浸透していると診断し、超人による全く新しい価値観の定立（日常からの超越）の必要を主張するのに対し、後者は、文法的アプローチにより、むしろ哲学者だけが、我々の生の形式を構成している文法を誤解することによって病いに冒されているのだとし、反省による理論化を却け、記述の方法によって明快さに至り社会復帰することが必

要だとする。

以上のような理解のもとに、論者は二人の立場を対決させる。ニーチェの観点からすれば、ウィットゲンシュタインの立場は平凡な価値観のニヒリスティックな受容として非難されるが、論者は、ウィットゲンシュタインの幾つかのアイディアを用いてニーチェの「力への意志」の概念を様々に批判し、更に、我々の日常はあらゆる価値の基準が意味を持つためのバックグラウンドに他ならず、その外からそれに非難を投げ掛けることはできないとして、ウィットゲンシュタインに軍配を上げている。(村上俊一)

Williams, Meredith: Wittgenstein, Kant, and the Metaphysics of Experience, *Kantstudien* 81(1), 69–88, 1990.

ウィットゲンシュタインの後期哲学をカント流の超越論哲学とする解釈を攻撃する論文である。この解釈によれば、後期ウィットゲンシュタインは、哲学的誤謬の源泉を明らかにするために認識の限界設定を行なったという点で、認識の条件を心性の構造ではなく言語の構造に求めるという違いこそあれ、カントと共通しているとされる。その際、カントの体系的な議論とウィットゲンシュタインの断片的な議論というスタイルの違いは、些細な戦術レベルの違いと見做される。

論者はまずこの点を取り上げ、認識の限界設定という作業には体系性が必須であることを論拠に、また、哲学の体系性を否定するウィットゲンシュタインのメタ哲学的主張との整合という点からも、両者の違いは全体の戦略に関わるものであるとする。

次いで、『確実性の問題』における「不動の命題」（たとえば、「地球は私が生まれるずっと以前から存在している」のような）が取り上げられる。カント的解釈の提唱者たちは、「不動の命題」を超越論的であるとし、ア・プリオリな総合判断に比するが、論者は、超越論哲学の備えるべき特徴として、認識の限界・基盤を積極的に与えること、この基盤が個々の経験から独立であること、しかも普遍的であること、の三点を挙げ、「不動の命題」がこれらの条件のいずれをも満たさないことを示している。(村上俊一)

Winch, Peter: Certainty and Authority, *Philosophy* 28, 223–237, 1990 Supp.

論者はこの論文で、『確実性の問題』におけるウィットゲンシュタインの主張を政治哲学に応用し、市民が国家に服従する義務と国家の権威との関連について考察している。

実践理性という概念には信頼と同意の場であるコミュニティという概念が含まれている。また人が有意義な問いを立てるためにはその問いに用いられる概念を既に学んでいなければならない。さらに子供がそのような学習を行うためには、

その子供は大人や情報提供者の権威をある程度承認していなければならない。そして何らかの問いに用いられる概念はある程度確実だと見なされた枠組みに属しているが、問いを立てることはその枠組み全体に対して疑問を投げかけることではない。まず論者はこれらのことを『確実性の問題』の諸断片を用いて示そうとする。

さらに論者はウィトゲンシュタインによるこれらの示唆を市民と国家の関係に関する問題に適応する。そして論者は、市民が既存の政体を承認するにせよしないにせよ、政体に対する評価は政治的権威に関する何らかの概念枠の中で下されているとする。そしてある政体に否定的評価を下すとしても、その評価はのために用いられている政治的概念枠の全体に対する疑問を含んではいないことを論者は示そう試みている。また論者はこのような試みを通じて、ホッブスらの社会契約説に対するヒュームの問題提起をとりあげ、その解答の方向をも示唆しようとしている。

(蔵田伸雄)

Wright, Crispin: Wittgenstein's Later Philosophy of Mind: Sensation, Privacy, and Intention, *The Journal of Philosophy* 86, 622–634, 1989.

人は言語によって分類を行う。その分類の正しさについて、その言語の使用者にとって正しいと思われることと、実際に正しいこととの間に本質的な区別が存在する時にのみ、その言語による分類は可能である。しかし、私的言語による感覚の分類の場合は、この区別の基準は存在し得ない。それ故、私的言語による感覚の分類は不可能である。筆者は、『哲学探究』258節が示している、私的言語の可能性に対する懐疑を以上のように解釈する。

しかし、私的言語の使用者は、或る言葉の意味をたてたときに、その言葉と或る種類の感覚とを結び付けようと意図したと考えることができる。そのような言語的意図の観点から、感覚に対して行われる実際の分類行為と、意図に従っている感覚の分類との区別をなすことができるであろう。そしてその場合、私的言語による感覚の分類について、正しいと思われることと正しいこととの間に本質的な区別が存在することになるだろう。私的言語の可能性を支持しようとする人は、このように主張するかもしれない。

ところが、意図等の志向的状态を知るということは、志向的状态という事実認識的接触を行うということではない。志向的状态を自分や他人に帰するという実践の目的は相互理解であり、実際の行為を理解可能なものにするという目的に沿って、意図等についての知識は変更され、したがって、どのような行為が意図に従っているのかについての知識も変更されて行くのである。とすれば、感覚について実際に行われる分類行為と全く独立に、どのような分類行為が言語的意図に従っているものであるかを確定することはできないということになる。それ

故、感覚について実際行われる分類行為と、言語的意図に従っている分類との間の本質的な区別に依拠することによって、私的言語による感覚の分類の可能性を支持することはできないということになる。

志向の状態の知識についての上述のような考え方で、私的言語の可能性についての懐疑とが、以上のような仕方に関連しているということを、筆者は指摘しているのである。
(久米 暁)

Wright, Crispin: Wittgenstein on Mathematical Proof, *Philosophy* 28, 79—99, 1990 Supp.

この論文は、数学的証明に関するライトの後期ウィットゲンシュタイン解釈を、テキストを引用しつつ初歩的な説明を含めて簡略にまとめたものである。ウィットゲンシュタインは数学的証明を真理の発見手段とみる数学的実在論に反対し、数学的証明は何かの発見ではなく新しい概念の形成であり、数学的必然性とは数学が概念を形成するという事実の表現にすぎないと述べている。ライトによると、クリプキによる解釈では、「懐疑的パラドクス」によって意味についての事実はないことが結論されるので、概念の形成も、その形成がなされたかどうかの基準も認められず、したがって数学的証明が何かを発見するという見方ばかりでなく、証明が実験以上に持つべき確実性も否定されることになる。ウィットゲンシュタインとのこの重大なずれは、クリプキの「懐疑的解決」によっては解消されない。それどころか「懐疑的解決」は、いかなる言明についても事実による真偽を問えなくなるという不整合を含む。(ライトによる論証を簡単に示す。言明の真理値が言明の「内容」(意味、意図など)と世界の状態との関数だという常識的立場をとり、また意味についての事実はないとすると、ある場合に使用されたある言明の内容に関してどう考えるのが正しいかは事実によって定まる問題ではない。するとその場合その言明の真偽は事実についての問題ではない。するといかなる文Pについても「P'は真である」は、したがってまた「P」は、事実についての真理値を持たない。)ライト自身のウィットゲンシュタイン解釈は、我々は判断を行なうとき、概念をプリミティヴに適用するのであり、意味や規則についての真理は何らかの形で我々の現在進行中の判断によって構成される、とする。したがって、実験的発見と数学的証明の区別は保たれる。そして数学的証明の手続きが我々を「強制」とみなされるのは証明の「現象論」であり、我々を「導く」とみなされるのは証明の「認知的資格」である。我々はすでに論理的推論における前提と過程と帰結とは「内的連関」があるはずだという自覚を持っており、その内的連関自体は知られ得ないにせよ、その最善の近似物を経験的に特定することができる。その近似物を経験的・認知的に理解することと、さらに内的連関に関する「慣習」に参加してそれに強制されることをとを区別することで、

ウィトゲンシュタインは数学的必然性を経験的認識論の枠内で扱う道を開いたのである。

この論文は、ライトの他の論文も参照しないと難解である。クリプキの不整合の論証には多くの疑問が残らざるを得ないだろう。そして我々に知られ得ない内的連関自体と、経験的に特定されるが恣意的な解釈にさらされるその近似物を区別するので、クリプキの立場と果たして非両立的なのか、という疑問が残る。

(田中総一郎)

Wrigley, Michael: The Orgins of Wittgenstein's Verificationism, *Synthese* 78, 265-290, 1989.

筆者が論じるのは、表題のとおりウィトゲンシュタインの検証主義の起源である。『論考』に関する最近の著作によれば、検証主義の見解はその基本概念と相容れないものとされている。しかし1929年にケンブリッジに戻るとすぐに、彼はまさしく検証主義の見解を述べることになる。このような思想的展開の見取り図から出発して、筆者は彼の検証主義の起源がどこにあったのかを問う。ケンブリッジに戻る直前の時期に焦点を当ててみると、ウィーン学団との接触とブラウアーの思想との接触とが、その疑問を解く手掛かりとして浮かんでくる。『論考』を書き終えた後、ウィトゲンシュタインの哲学に対する関心は一般に低調であり、ウィーン学団の諸氏との議論も、以前の自分の見解を根本的に変えたり拒否したりする場合に伴うような熱心さを示していない。またブラウアーの思想は、ウィトゲンシュタインに影響を与えたにしても、検証主義の見解とは別の面であると見ている。こうして筆者は、どちらにも彼の検証主義の起源を求めることは出来ないと考える。

そこでこの袋小路を切り抜けるために筆者が再度注目するのは、ウィトゲンシュタインが、検証主義を掲げるウィーン学団の諸氏との議論に、熱心ではないにせよ参加し続けたという事実である。このことから推測されるのは、『論考』の思想と検証主義とが連続性を持つということである。したがって、『論考』の思想と検証主義とが相容れないという想定から出発することがそもそも誤っており、『論考』のうちに検証主義が明示的ではないにせよ何らかの形で含意されていると考えられるのである。検証主義の起源は『論考』にあるというのが、筆者の主張である。

(竹島尚仁)

Zemach, Eddy: Wittgenstein on Meaning, in *Wittgenstein in Focus—Im Brennpunkt: Wittgenstein*, Mc Guinness, Brian (ed), 415-435, Amsterdam, Rodopi, 1989.

ウィトゲンシュタインは、心的な表象が語の意味に何の関係も持たないと主張

していると考えられている。それはつまり心的な表象が語の適用ないし使用に対して拘束力を持たないということである。しかし筆者はこの解釈を覆そうと試みる。

筆者が着目するウィトゲンシュタインの議論は、我々が常に対象を「～として見る」というところである。たとえば猫という語を使用する時、我々はその語を、適用された対象に合致しているものとして見ている。これに対しロボットなどは、同じ語を発したとしても、それを何かに合致しているものとして見る事ができない。我々が語の意味を理解していると言えるのは、このように語を見ることが出来るからである。したがって語の意味とは、ある対象に合致するがそれ以外の対象には合致していないという、語についての印象に他ならない。そしてまた、猫という語を使用する時、猫という語が猫に合致しそれ以外の対象に合致しないという共通の印象を我々が持つのは、猫を別のものとして見るよりは、むしろ猫として見るほうがふさわしいという、同じ審美的な好みを持つからだと筆者は考える。この事実は我々が文化（ウィトゲンシュタインが重視していたもの）を共有していることに由来するとされている。

こうして筆者の見解によれば、語が何を指示するかは意味論的な役割を担う心的な表象によって決定されるのである。つまり語の使用はこの心的な表象によって決定されることになる。これは、語の意味とは使用であるという定式化が文字どおりウィトゲンシュタインの主張を表すものではないことを意味している。とはいえ筆者は、使用が語の意味を規定するというを全面的に否定するわけではない。使用は意味の発生に関っており、過去の使用が意味を規定していると考えられている。

（竹島尚仁）